公爵の犬

俺２

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
公爵の犬

【Ｎコード】
Ｎ６２９０Ｕ

【作者名】
俺２

【あらすじ】
とある少年の物語。ゼロ魔の二次って書いた事無いんだよね、という事で書いてみた。　自分的にはそこそこの予感。

何の変哲も無い村に生まれた男の子は、母と二人暮しだった。
父を早くになくし、母が働き二人はなんとか生活していた。

しかしそんな日常は簡単に崩れ去ってしまう。

母は体調を崩しもう働く事は出来ない、子は一生懸命に働いた。
自分に出来る事は何でもやった。
畑を耕した、商人にしがみ付いて少しでも安くしてもらおうとした、森の中に入って食べ物を探した、川に行って魚を取ろうとした。

しかしどれもが失敗した。
どんなに頑張ろうとも子供の力ではどうする事も出来ず、商人には蔑ろにされ、森に入っては食べれるものが分からず、魚は取れなかった。

それでも必死になって子は働いた。
時には隣人に教えを請い、長に頭を下げ、少しでも母に食わせてやろうと必死になった。
しかし働けども働けどもお金は貯まらず、母は痩せ衰えていくばかり。

「そこの、どうした」

汚く汚れ、地面に蹲っていた子に話しかけたのは一人の身なりの良い男だった。
この時かけられた声がこの子の転機であったのは言うまでも無かった。

「アレス！　アレスはいるか！」
「公爵様、ここに」

男の子はいつしか大きく立派になり、１２をむかえた。
公爵があの子に声をかけたのはたまたま、しかしその子は恩を返す為に働き、今では公爵の付き添いとして有名になっても居た。

公爵が望むのであれば学を身に付け。
公爵を守りたいから剣を学び。
公爵のために紅茶の入れ方を習った。

この身は全て公爵様のものであり、公爵様のためにある。
ゆえにこの身は公爵家のモノである。

母はすっかり良くなり、今でも村で暮らしている。
公爵から頂いた給金は少しを手元に残し他を全て母に送った。
本当であれば全て送りたかったのだが、公爵様の隣にいる以上、自身もそれなりの格好をしていなければ公爵様の品位を落としてしまうことになりかねない。
そのお金は家から出すと公爵は言ったがアレスはそれを聞かず、自身の給金からそれを捻出した。
時に月に一回もお金を使わ無かった事もある。

そのあまりに忠実な姿からアレスはいつからか「ヴァリエールの忠犬」と貴族達から言われるようになった。
それは蔑称ではなく、いつもであれば気にもかけない平民に対してはこれ以上無いほどの敬称であった。

「お父様、アレスを独り占めしないで下さい！」

「おぉ、すまない私の可愛いルイズ」

最初は平民、しかも汚らしい容姿の子供を雇う事に反対していた公爵家の人々であったがその「ただ公爵家の方々のために」というひたむきな姿勢に少しずつその考えを改めていった。

その結果、普通であれば厳しいはずの公爵夫人も誰の目も無い場所ではクッキーなどを笑顔で分けるという公爵が思わず嫉妬してしまうような出来事もあった。

もちろん彼は素晴らしい心意気を持って励んでいたが最初の頃は失敗の連続だった。

どんなに素晴らしい心意気を持っていてもまだ１０にも満たない子供、その心はとても脆いものであった。

その日も失敗をして「今日はもう休め」という言葉をもらったアレスは公爵家の近くにある湖に来ていた。

ここならば誰に見られることも無く泣ける事が出来るというのは今までの経験から理解できていたから。

湖の辺まで来たところでアレスは地面に直接座り、泣いた。

自分には才能が無いのかと、自分にはどうする事も出来ないのかと、雇って頂いた恩を返す事が出来ないのかと。

声を抑えて泣いた、しかしそれはいつしか抑える事は出来ずに声になっていく。

「誰？」

「え？」

そこに居たのは桃色がかったブロンドという公爵家の女性を意味する髪を持つ少女だった。

アレスは涙を急いで拭うと立ち上がりビシッと気を付けをして頭を下げる。

「こ、これはルイズさま。お見苦しいところお見せしてしまい申し訳ありませんでした！　では失礼します！」

「待って！」

その場から急いで逃げ出そうとするアレスをルイズは止める。

もちろんアレスにとってみればその程度で走れなくなるほどか弱じゃ無い、しかし相手は公爵家の娘、ひいては自分が仕える公爵様の娘なのである。

「ちょっとだけお話しよう？」

そう言われて断れるはずも無かった。

二人は湖に浮いている小船の中でボソボソと話した。

と言ってもルイズの話を一方的にアレスが聞いているだけのものではあったが。

ルイズ様はとても追い詰められていたらしいという事はまだ幼さの残るアレスにも理解する事が出来た。

話しているうちにルイズが目に涙を浮かべた。

その事にビックリし、どうしていいのか分からずアレスはとにかく話し始める。

「ルイズ様、私は頑張ります。どんなに失敗しようとも頑張ります、そしていつしか公爵様に拾っていただいた恩を返したいのです」

「そ、それはだから私も頑張れって事？」

「あ、いえ、その」

ルイズに涙目で睨まれてアレスはおどけてしまう。
何かを言おうにも言葉が出てこずアレスはしどろもどろに意味も無い事を口走っているだけになった。

「ぼ、僕が守る！」

混乱しすぎてアレスの口調は素のものになっていた。
その言葉にルイズは呆然としてアレスの顔を眺めた。

「えっと、わ、私が守ります！　ですから……ですから、えーっと」

言葉が出てこない。
えーっとえーっとと意味の無い言葉しか出てこない。
しまいには自分はどうしてこんなにも役立たずなのかと目に涙を浮かべてしまった。
その様子にルイズは思わず吹いてしまう。

「男の子が泣くんじゃ無いわよ」
「ごめんなざい」

全くとルイズは自身のポケットからハンカチを取り出し、それでアレスの目を拭ってやる。

「全く、平民に慰められるなんて私は貴族としてダメね」

どこか大人っぽく言おうとして胸を張ってルイズは言った。
それはルイズの二つ上の姉にそっくりだった。

「見せてくれるんでしょ？」
「うぇ？」

「頑張って立派になったところを見せてくれるんでしょ？」
「うぐ……はい！　頑張ります！」

涙を服の袖で拭い、大きな声でアレスは返事をした。

それから二人は何度かこうして二人っきりで話をしていた。
ある時は失敗の報告、ある時は褒められた時の話。
こうしてアレスを一番最初に受け入れてくれたのは一番下のルイズだった。

それから数年の時が流れ、今ではその名を貴族の間でも知られるようになったアレスはその姿をルイズに褒められ、絶賛された。

「アレスが頑張ったんだもの、その主人である私だってやってやるわよ！」

そうルイズが笑顔で宣言したのは学園に向かうその日の出立の時であった。

それからさらに時は流れ。

「アレスーアレスどこー？」
「ルイズ様、こちらに」

ルイズがとある殿方と結婚された後もそれに付き添いった一人の執事。
ヴァリエールの忠犬はいつまでもその身を捧げた。

（後書き）

ちょっと終らせ方が無理矢理すぎたかなｗｗ　その辺りについてアドバイスとか欲しいです。

自分ならこうするとかでもお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6290u/

公爵の犬

2011年7月6日13時21分発行